The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Bleak House の空間 : Lady Dedlock を中心として
Author(s)	新野, 緑
Citation	Osaka Literary Review. 1982, 21, p. 62-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25617
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Bleak House の空間

——Lady Dedlock を中心として——

新　野　　緑

I

Dickens の作品を読む時，我々に強い印象を与える要素のひとつは，登場人物をめぐる時間と空間の感覚である。我々は，既に別の場所で *Bleak House* における時間構造を，この小説の語り手の一人である Esther Summerson を中心に見た。[1] 小論では，Esther の対極にある彼女の母 Lady Dedlock の生の軌跡を，彼女を取り巻く空間を軸として考えてみたい。

上流社会から貧民階級まで広大な世界を描き出すこの小説において，お互いに何ら係わりを持たぬように思われた多種多様の登場人物が，Lady Dedlock との結びつきを次第に明らかにされてゆく物語の展開を見ると，"she is the pivot it all turns on" (p. 782) [2] という Bucket 警部の言葉は十分に肯定されるように思われる。[3]

Lady Dedlock は，古い家柄と権力を誇る従男爵 Sir Leicester Dedlock の奥方として社交界に君臨する美貌の貴婦人である。小説の冒頭紹介される彼女の履歴は以下の如くである。

> A whisper still goes about, that she had not even family . . . . But she had beauty, *pride, ambition, insolent* resolve, and sense enough to portion out a legion of fine ladies. Wealth and station, added to these, soon *floated* her *upward*; and for years now my Lady Dedlock has been at the centre of the fashionable intelligence, and at the *top* of the fashionable tree. (p. 57)

pride, ambition, insolent とイタリックで示した語は，他の者を見下し，自ら高くあろうとする Lady Dedlock の「上昇」への強い意志を示してい

る。しかも，*float upward, top* という語句から、我々は、Sir Leicester との結婚を契機として，急速に社会の最上層へとのし上がってきた彼女の人生の軌跡をたどることができる。

このLady Dedlock の現在の地位は，更に "the shining *heights* she has *scaled* and taken" (p. 706) もしくは "the *high* place she has graced so well" (p. 800) と形容されてゆく。つまり，過去から現在に至る Lady Dedlock の人生は，きわだった上昇線を描いていたと言えよう。しかも，Sir Leicester の愛情に支えられて彼女の地位は揺るぎようのないものと見える。

ところが，Lady Dedlock には誰にも知られぬ暗い過去がある。Sir Leicester との結婚以前，彼女は恋人 Captain Hawdon との間に私生児 Esther を儲けたのである。それは確かに，彼女が人生において唯一情熱を傾けた幸福なひと時であった。しかし，私生児として生まれた子供は家の恥として死産と偽られ，彼女の手許から奪い去られてしまう。そして，彼女は子供が生きていることを知らぬまま，Sir Leicester 夫人となったのである。

彼女の現在の地位は，この過去の秘密の上に建てられている。その過去が幸福であり，しかも，その過去を夫からも世間からも包み隠していることにより，過去は Lady Dedlock の意識に重くのしかかっていると言えよう。

この Lady Dedlock の意識を最も明確に示しているのは，Estherへの告白の場面であろう。Esther を我が子と知った Lady Dedlock は，自らの過去を打ち明け許しを乞う。しかし，すべてを許すという Esther に Lady Dedlock は，

> To bless and receive me . . . it is far too late. I must travel my dark road alone, and it will lead me where it will. From day to day, sometimes from hour to hour, I do not see the way before my guilty feet. This is the earthly punishment I have brought upon myself.
> (pp. 565-566)

と答えて，その許しを受け入れることの不可能をかみしめる。

「もう遅すぎる」という彼女の言葉に，取り戻しようのない過去の感覚は明らかであろう。過去に縛られ，未来を信じることのできない Lady Dedlock にとって，人生は，いつどんな形で来るとも知れぬ「終り」に向かう，暗い，刻一刻と消え去る「道」と意識されている。現在の自分を「罪深い」と思い，人生を「罰」と感じる Lady Dedlock の時間は，下降線をなしていると言えよう。彼女は，その内的な奈落に刻一刻と落ち込んでゆく自分自身を意識せざるをえない。[4)]

先に述べた Lady Dedlock の社会的，外面的な人生の上昇と，この内にひそむ下降の意識は，非常な落差を示している。このような内面と外界の不調和のうちにあって，社交界の花形として常に外界からの視線を意識する Lady Dedlockが身につけたのは，あらゆる感情を押し殺す倦怠の仮面であった。

> My Lady Dedlock, having conquered *her* world, fell . . . into the freezing mood. An exhausted composure, a worn-out placidity, an equanimity of fatigue not to be ruffled by interest or satisfaction, are the trophies of her victory. (pp. 57-58)
>
> 〔イタリックは Dickens〕

この変わることのない倦怠の表情は，初めて Lady Dedlock に出会った Esther の

> Neither did I know the *loftiness* and *haughtiness* of Lady Dedlock's face, at all, in any one. (p. 305)

という言葉が示すように，俗人を寄せつけぬ高慢のしるしと受けとられる。*loftiness, haughtiness* という表現に注意しておこう。同じ「高慢」を表わすにしても，社会の最上層に位置する貴婦人という彼女の境遇との照応を感じさせる。

実際，たとえば，彼女の側仕え Hortence の "My Lady is so *high*; so very *high*." (p. 372) という言葉にも見られるように，「高慢」は Lady

Dedlockの人柄を示す常套的な表現となっている。彼女は，小説中一貫して，その社会的地位の高さにふさわしい，冷やかで高慢な人物というイメージを崩さない。先に引用した "the only natural moments of her life" (p. 566) と称されるEstherへの告白の場面を除いては，小説中にその内心を言い表わすこともほとんどなく，固定した人物像のままに，常に外側から描き出されてゆく。

ところが，消しようのない過去の意識に苛まれるLady Dedlockの内面のドラマは，奇妙ななまなましさをもって読者に伝えられるように思われる。その重要な鍵となっているのが，彼女を取り巻く空間の描写ではないだろうか。

II

Lady Dedlockが初めてこの小説に姿を見せる場面は，Lincolnshire州のDedlock邸，"her 'place'" と呼ばれるひとつの「場所」の描写に始まる。

> The adjacent low-lying ground, for half a mile in breadth, is a *stagnant* river, with *melancholy* trees for islands in it, and a surface punctured all over, all day long, with falling rain. My Lady Dedlock's 'place' has been extremely *dreary*. (p. 56)

続いて，あたりの湿りきった森や，"alternately a *lead-coloured* view, and a view in *Indian ink*" と形容される窓からの眺望などが，Dickens特有の精密さで描き出されてゆく。彼女の「うち」"her 'place'" の薄暗い陰気なたたずまいは，きらびやかな社交界の花形としての彼女の姿と鋭い対照を見せ，Lady Dedlockにまつわる暗い雰囲気をかもし出してゆく。[5)]

彼女の「うち」に出入りする様々な人物の中で，Dedlock家の顧問弁護士Tulkinghornは，とりわけ印象深い人物である。Dedlock邸に私室を持つこの弁護士は，"the steward of the legal mysteries, the butler of the legal cellar, of the Dedlocks" (p. 59) と形容され，彼女の「うち」に含め

る役割の重要さを強調されているからである。

Tulkinghorn が物語に登場する最初の描写は，その性質をはっきりと示すものであろう。

> One peculiarity of his *black* clothes, and of his *black* stockings, be they silk or worsted, is that they *never shine.* Mute, close, *irresponsive to any glancing light,* his dress is like himself. (p. 59)

Tulkinghorn の光を寄せつけぬ暗いイメージは，Lady Dedlock を取り巻く暗いかげを一身に凝縮したかのような趣きがある。

そのうえ，Lady Dedlock 自身がもらす

> He is always vigilant, and always near me. I may keep him at a standstill, but I can never shake him off. (p. 567)

という言葉にも明らかなように，Tulkinghorn は，常に Lady Dedlock の側近くにそのかげのような姿を繰り返し現わすのである。しかも，彼は，"black figure" または "rook" と形容され (p. 213)，その黒衣を何度も描かれ，常に暗がりに姿を現わすことで，その暗いイメージを強調されてゆく。

このように，その描写において同一のイメージが反復されてゆくことにより，Tulkinghorn の実在の人物としての存在感は薄れてゆくことになる。かわりに，その「暗い影」という象徴的観念だけが強調され，肉化され，読者に印象づけられるのである。[6)]

Tulkinghorn の存在の意味は，Lady Dedlock の秘密をその手に握り，彼女の前に立ちはだかる彼を描いた以下の一節に明らかであろう。

> He stands before her . . . exactly as he has stood before her at any time since her marriage . . . the whole man the same *dark, cold object,* at the same distance, which nothing has ever diminished. (p. 632)

ここで，Tulkinghorn が "object" と形容されることは，我々の注意をひく。Lady Dedlock の結婚以来，常に彼女の前に立ちふさがる「暗く冷たい物体」としてのTulkinghornは，彼女の現在に現われ，未来を暗くする

黒衣をまとった過去の亡霊なのである。

手中に収めた秘密をかさに，彼女を意のままにあやつろうとするTulkinghornに，Lady Dedlockは言う。

> I am to remain on this gaudy *platform,* on which my miserable deception has been so long acted, and it is to *fall beneath* me when you give the signal? (p. 637)

彼女が社交界の花形としての役割を演ずる場が「けばけばしい舞台」であるとすれば，Tulkinghornは，その「陥落」を，ひいては，Lady Dedlockの「落下」を促すものなのである。

ここに，「暗い影」に加えて，「下降を促すもの」としての，いまひとつのTulkinghornのイメージが示されている。実際，テキストを少し読み返してみると，Tulkinghornは，その役割を "the butler of the legal *cellar,* of the Dedlocks" (p. 59) と形容され，腹の底の知れぬ様子を *"unfathomable depths"* (p. 363) と叙述され，更には，Lady Dedlockの秘密を詮索する姿を "he looks as if the digger and the spade were both commissioned, and would soon be digging" (p. 638) と墓掘り人に喩えられるなど，この「下降を促すもの」としてのイメージが，彼の描写に重ねられているのが分る。

以前と何ひとつ変わらぬ生活を続けてゆくことというTulkinghornとの契約を破り，お気に入りの側仕えRosaを自分の恥辱の巻き添えから救おうとするLady Dedlockの眼前に現われたTulkinghornを描く次の一節は，この彼のイメージを印象深く伝えるものである。

> Interposed between her and the fading light of day in the now quiet street, his shadow *falls* upon her, and he darkens all before her. (pp. 708-709)

道の彼方に「薄れゆく日の光」は，沈みゆく夕陽を連想させる。それはLady Dedlockと重なり合い，輝かしかった彼女の運命の下降を暗示する。し

かも，それまでTulkinghornに重ねられた「下降」のイメージが比喩であったのに対し，ここではTulkinghornの影は，実際に彼女に「落ちかかる」のである。こうして，Tulkinghorn は，Lady Dedlock の暗い過去を象徴しつつ，彼女の下降を促す力として，小説中に繰り返し姿を見せることになる。

III

ここで，先に引用した Lady Dedlock の「うち」を描く小説冒頭の数行を読み返してみよう。

> My Lady Dedlock has been *down* at what she calls, in familiar conversation, her 'place' in Lincolnshire. The waters are out in Linconshire. An arch of the bridge in the park has been *sapped* and sopped away. The adjacent *low-lying* ground, for half a mile in breadth, is a stagnant river . . . and a surface punctured all over, all day long, with *falling* rain. (p. 56)

down, sap, low-lying, fall とイタリックで示した語は，一読して明らかなように，下降，もしくは下降を促すもののイメージを伝えている。[7] 以後も，Lincolnshire の描写には降る雨がともない，そこでの下降の感覚を強めてゆく。

やがて，降り続いた雨があがり，Dedlock の館にも日の光が射し込む。

> Athwart the picture of my Lady, over the great chimney-piece, it [the sunshine] throws a broad bend-sinister of light that *strikes down* crookedly into the hearth, and seems to rend it. (p. 204)

"bend-sinister" というのは，紋章の盾の左上部から右下部にひかれた帯線を意味する。それは，紋章学において，庶子の印とされているものである。ここで，窓から射し込んだ太陽の光もまた，Lady Dedlock の過去を暗示しつつ，彼女の肖像を上方から下方へと射しつらぬく形で，暖炉に「落ちる」ことになる。

このように，Tulkinghornをはじめとして，Lady Dedlock をめぐる空間に存するものは，彼女の過去を暗示しながら，物理的に下方へ下方へと働きかける力として描き出されてゆく。それはまさしく，過去に縛られたLady Dedlock の下降の意識，すなわち彼女の内面と照応していると言えよう。

このように見てくると，Lady Dedlockにとって，先に述べたEstherへの告白の場面が如何に重要な意味を持っていたかが分るであろう。取り戻しようのない過去の意識に苛まれる Lady Dedlock にとって，その過去を告白し，Esther の許しを得ることは，過去からの解放を意味したからである。

Dedlock 邸の "*deep* shade" (p. 563) から抜け出した Lady Dedlock は，Esther のたたずむ "*higher* ground" (p. 562) へと登ってくる。そして，Estherの足下に身を伏せると，その過去を告白して許しを乞うのである。Estherは彼女のすべてを許し，彼女を助け起こそうとする。

> I *raised* my mother *up,* praying and beseeching her *not to stoop* before me in such affliction and humiliation . . . besides the trouble I was in, *it frightened me to see her at my feet.* (p. 565)[8]

これは，その場の状況を考えると当然の成り行きと言えるかも知れない。しかし，「母が私の足下に跪いているのを見ることが，私を怯えさせた」という Esther の言葉は，単なる Esther の孝心のみでない，「身を伏せる」という Lady Dedlock の行為自体の重みを示してはいないか。実際，同様の場面はこの直後に再び繰り返され (p. 566) 強調されることになるのである。

Estherの許しを拒絶したLady Dedlockは，先に述べた自らの下降的な意識を告白すると，彼女を助け起こそうとする Esther の手を振りほどいて，再び Esther の眼下に横たわるDedlockの館へと戻ってゆく。上昇を促す Esther と，それを拒絶して自ら下降してゆく Lady Dedlock は鮮かな対照を見せている。

以後，Lady Dedlock の描写には，先に述べた Tulkinghorn を含めて，更に下降のイメージが重ねられてゆくことになる。たとえば，Tulkinghorn の急死により秘密が発覚した時の Lady Dedlock の様子を，Dedlock 家の召使頭 Mrs. Rouncewell は，

> . . . she looked to me — and I may say at me too — as if the step on the Ghost's Walk had almost *walked her down.* (p. 845)

と描き出す。the Ghost's Walk の足音というのは，Dedlock 家に代々言い伝えられ，一家に不名誉のもたらされる時には必ず聞こえるという音である。その単調な足音は，降る雨の反響とも言われるが，Lady Dedlockの私室，ことに，そこに据えられた古い時計の音の合間から聞こえてくる (p. 141)。Lady Dedlock の過去との結びつきを暗示しつつ，小説中しばしば言及されてきたこの足音は，ここに至って彼女を「踏み倒そう」とするのである。

Lady Dedlock の身の破滅の原因となった Tulkinghorn の急死の意味は，次のように説明されている。

> What was his death but the key-stone of a gloomy arch removed, and now the arch begins to *fall* in a thousand fragments, each crushing and mangling piecemeal! (p. 816)

そのうえ，Lady Dedlock 自身も己れの状態を

> It was right that *all that had sustained me should give way* at once, and that I should die of terror and my conscience. (p. 864)

と言い表わすのである。Lady Dedlock の人生の破滅を表わすこれらの比喩は，彼女自身と彼女を取り巻くものの強烈な下降，落下のイメージを示す。それは，先に述べた Lady Dedlock をめぐる物理的な空間における下降のイメージと相まって，強い印象を与えるのである。

Ⅳ

Lady Dedlock の秘密の発覚から彼女の死に至る逃避行の場面は，これまで示した彼女をめぐる様々な「下降」のイメージが重ね合わされた最も印象深い空間を作り上げているといえよう。

秘密の発覚を知った Lady Dedlock は，すべてを捨てて London の屋敷を後にする。彼女は Esther を縁として知り合った煉瓦職人の妻 Jenny のもとで衣服を取り代えると，Jenny を身代りとして Lincolnshire 州の Dedlock 邸へ向けて送る。そして，自らは London の貧民街，恋人 Captain Hawdon の葬られた貧民墓地の前で息絶えるのである。

この逃避行の模様は，Bucket 警部に連れられて Lady Dedlock の後を追う Esther によって語られる。その間，Lady Dedlock が直接に描き出されることはない。ただ，刻々と移り変わる天候や町並み，あたりの風景などが細かく描写されてゆくのみである。[9)]

たとえば，Lady Dedlock 追跡の直後に降り始めた雪は，次第にみぞれに変わり，追跡の間中降り続くが，それは，

> The air was so *thick* with the darkness of the day, and the density of the *fall* . . . .　(p. 837)

そして，

> The sleet *fell* all that day unceasingly, a thick mist came on early, and it *never rose or lightened* for a moment.　(p. 838)

さらに，

> It is *falling* still . . . and drip, drip, drip, with the regularity of the Ghost's Walk, on the stone floor *below*.　(p. 855)

というような細密な描写を伴い，その下降のイメージが印象づけられる。

しかも，Lady Dedlock の旅の目的地に徐々に近づいてゆくその過程を示す Esther の

> Whenever I saw him [Bucket] directing the driver, I was prepared for our *descending into* a *deeper* complication of such streets, and we never failed to do so. (p. 858)

という言葉にも見られる通り，Lady Dedlock の旅自体が，"labyrinth of streets" (p. 827) と称される London という迷宮の中を下降してゆく旅なのである。

その迷宮の中心，"a dark and miserable covered way" (p. 867) の行き止まり，まさに，彼女の人生を象徴するかのような場所に，[10] 煉瓦職人の妻の姿で倒れ伏している Lady Dedlock を Esther は見出す。

Dickens は，Esther にその姿を描かせることで，その外面的な描写のみを与えて Lady Dedlock の人生に幕を引くことになる。

> On the step at the gate, drenched in a fearful wet of such a place, which oozed and splashed *down* everything, I saw. . . a woman *lying*—Jenny, the mother of the dead child . . . . I saw before me, *lying* on the step, the mother of the dead child. She *lay* there, with one arm creeping round a bar of the iron gate, and seeming to embrace it. (p. 868)

Esther はここで，変装した Lady Dedlock を Jenny と思い込んでいる。それ故，これらの描写は直接的には Jenny を指すと考えられる。しかし，ここで実の子 Esther から発せられる「死んだ子の母親」という言葉は，大変重い響きを持っている。しかも，その言葉は二度繰り返され，強調されるのである。つまり，その形容は，読者の中で Lady Dedlock と重なり，Esther を受け入れることなく過去に縛られたままで息絶えるしかなかった彼女の姿をきわだたせることになる。恋人の墓地の扉を抱きしめて息絶えた彼女の情熱に対し，それをはばむ鉄の扉の冷たさは，彼女の疎外観をひしひしと伝えている。

作者は何度も *"lie"* という動詞を用いて，Lady Dedlock の倒れ伏した姿を強調するが，貧民の衣服を身にまとい，四方から滲み出し流れ落ちる水

の中に身を横たえた Lady Dedlock の死の姿は，彼女にまつわる最後の「下降」なのである。

Lady Dedlock をめぐる物理的，比喩的なイメージを通しての「下降」の解読は，*Bleak House* の「空間」の重要性を明らかにする。消しようのない過去に追われて人生を下降する Lady Dedlock の意識は，彼女を取り巻く意味に満ちた空間，すなわち人間的な空間に描き出されることになる。そして，人間の精神に過去が及ぼす影響の重さは，*Bleak House* 以後の Dickens の作品に「時間」「空間」を軸としての重大な問題としてひきつがれてゆくのである。

註

1）拙稿「『荒涼館』における時間構造」*The Edgewood Review,* VIII (1981) pp. 57-74 参照。

2）テキストは *Bleak House,* ed. Norman Page (Harmondsworth : Penguin Books, 1971) を用いた。以下，*Bleak House* からの引用はすべて Penguin 版により，該当頁数のみを引用文の末尾に記す。なお，本文を引用する際，イタリックで強調した箇所は，特に断わらぬ限り，筆者によるものである。

3）たとえば，Mark Spilka は "In terms of dramatic tension . . . the whole novel is grounded in socio-sexual mystery —— or in the sin of Lady Dedlock and Captain Hawdon, of which Esther is the illegitimate fruit." と述べている。

Mark Spilka, *Dickens and Kafka* (Bloomington, Ind. : Indiana University Press, 1963), p. 206。

また，W. J. Harvey は *Bleak House* における "the idea of corruption radiating out from a rotten centre" を指摘した後に，"But this idea is counterpointed, in plot terms, by the sense one has of convergence, especially the sense of something closing-in on Lady Dedlock." と述べている。

W. J. Harvey, *Character and the Novel* (London : Chatto & Windus, 1965), p. 96。

4）Lady Dedlock の下降の意識は，私生児として彼女と同様，過去の影を背負うべく生まれついた Esther が，常に明るい未来を信じて上昇的な意識を示すのと著しい対照を見せている。詳しくは，拙稿「『荒涼館』における時間構造」参照。

5）C. B. Cox は，Dickens の小説における風景がその小説の登場人物の精神の反映となっているとして，この冒頭の部分を引用し，それが "a frightening picture of Lady Dedlock's total apathy and depression" を伝えると述べている。

C. B. Cox, "A Dickens Landscape," *Critical Quarterly,* II (1960), pp. 58-60。

6）辻　邦生，『小説への序章』（中央公論社，1979), pp..208-265 参照。

7）"down" という語は，Lincolnshire 州の Dedlock 邸を描く際，常套的に冠せられる形容である。それは，第一義的には London という都会に対する田舎を意味するが，同時に「下降」のイメージをも含蓄する。

8）"my" のイタリックは Dickens による。

9）J. Hillis Miller は，この Lady Dedlock の死に至る逃避行を "a subtly symbolic dramatization of the destiny of Lady Dedlock and of her relation to her daughter" として，その象徴的意味を論じている。

J. Hillis Miller, *Charles Dickens : The World of His Novels* (Cambridge : Harvard University Press, 1958) pp. 203-205。

10）Lady Dedlock という名は大変意味深い。その発音から "deadlock" を連想させるこの名は，Sir Leicester との結婚により過去に追われて破滅する彼女の人生を象徴するものなのである。